

あらすじ

認知症のハリーは、これから入居する介護施設で、看護師のメイに迎えられる。しかし、ろうのハリーには、メイの言っていることが分からない。同じく、メイは手話を知らず、ハリーの言葉を理解できずにいる。安心させ、この部屋を家のように感じてもらおうとするも、ハリーは混乱している。自分がどこにいるのかが分からない。彼は、妻のエリーズとの夕食に遅れているにもかかわらず、メイが行かせまいとしていると思い込んでいる。

メイはハリーが「落ち着く」よう部屋を出ていく。ハリーは、レストランで待つエリーズに会いに行くことにする。身支度を整え、鏡で確認すると……そこに映ったのは、若き日の自分の姿だった。これは記憶か、幻覚か。

彼は驚き、倒れ込む。メイが駆け寄り、安心させようとするが、ハリーは混乱したままだ。エリーズとの夕食に行かなくてはと、必死に伝えようとする。メイは、ここが彼の「家」であり、どこにも行く必要はないと優しく諭す。

時が経つにつれ、メイはハリーと意思疎通を図るために手話を学んでいき、その一方で、認知症が進むハリーは、少しずつ手話を忘れてゆく。それでも二人は、より深いつながりの中で、お互いを理解し始める――言葉を越えて。

やがて、ハリーはこの新しい「家」に閉じ込められているように感じ始め、エリーズの元へ行こうとする。出て行きたい。すると、閉ざされていた壁が崩れ、壊れた記憶の世界が現れる。現実なのか、幻想なのか。混乱の中、ハリーは過去の断片を必死につなぎ合わせる。エリーズとの初めてのデート、一緒にベッドで過ごした夜、浜辺での散歩、泳いだ日、子どもの誕生、葬儀。彼は何を探し求めているのか。「向こう側」から届く意味、和解、赦し。残された時間が、確実に過ぎていく。

ハリーの命は終わりを迎えようとしている。その心は和解を求め、身体という現実は次第に力を失っていく。メイは思いやりと献身により、そのハリーの生から死への旅路を支える。美しく、超越的な最後の瞬間。その死の先で、ハリーはようやくエリーズに再会するのかもしれない。